

第36回

「女と男のより良い未来 ～ひとりの自立、ふたりの自立」

自分らしい生き方を目指すことは誰もが願うことです。ところが、目指すと実現の間には大きな隔たりがあるように感じませんか?たとえば、女性と男性の役割が決まっていた職場で能力を認められなかったり、育児休暇取得の申請をしたら変な顔されたり、家庭で一人だけ奮闘していたり……。

また、わかっているつもりだった人(オトコ、オンナ)の言葉に強い思い込みを発見し、相手のことが理解できなくなった経験はありませんか?

「わかりたいのにわからない」が「わからないしどうしようもない」に変わる前に、いろいろ話してみましょう。

一人ひとりが個性を生かし、自分の可能性を伸ばすためにジェンダー(※)の視点を見直すことは有効です。身近な問題を取り上げたワークショップで、女性も男性もお互いを理解しあえるためのヒントを探り、より良い関係づくりに向けて何が大切か考えてみましょう。

※ジェンダー…社会的・文化的につくられた性差

4月29日(祝) 13:00開会(16:00閉会予定)

【ゲスト】三輪敦子さん(元国連女性開発基金(UNIFEM)職員)

○会場…應典院本堂ホール

○参加費…会員1,000円(一般1,500円)

○主催…應典院寺町倶楽部

いのちと出会う会

いのちについて語り合う場として定着した「いのちと出会う会」。4月と5月の予定をお知らせします。

第28回

4月17日(木)

「遺族として

共に生きる」

話題提供者

神戸ひまわり遺族の会 中村寿子さん
12年前、大腸ガンでご主人を39歳の若さでなくされた中村さん。同じ悲しみを背負った遺族と気持ちを分かち合うため、「遺族の会」を立ち上げられました。遺族の心の立ち直りを支援する活動の姿を語っていただきます。

第29回

5月15日(木)

「『生と死の教育』と

若者たち」

話題提供者

関西学院高等部教諭 古田晴彦さん
若くして伴侶を病で亡くされ、生きること、死ぬことについて深く学ばれ、昨年暮れにテーマと同名の著書を著されました。今、震災や児童殺傷事件が起こった神戸で、いのちの尊さ、生死の問題を10代の若者たちとともに考える授業が行われています。日本人による、ぬくもりの伝わるデス・エデュケーションの誕生です。

※いずれも18:30開会、21:00閉会

2003年度会員総会は、
5月20日に開催予定!!

4月、新年度を迎え、事務局一同、決意も新たに今年度もがんばっていききたいと思います。

4月はもっとも会員更新の方が多い時期、ぜひ寺町倶楽部に引き続き、ご参加をお願いします。4月が更新時期となる方には、更新月のお知らせと振り込み用紙を同封いたしますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いします。

さて、会員総会を5月20日(火)の午後7時からの開会を予定しています。ぜひ多くの会員のみなさんのご参加をお待ちしています。なお、詳しいご案内は、あらためてお送りします。

○日時

5月20日(火)

午後7時開会(予定)

○場所

應典院

【新入会員ご紹介】

(2003年4月10日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○個人会員

【大阪府】

高橋清美 吹田市

サリュ VOL. 37

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2003年4月10日
(偶数月発行)

編集長 川井田祥子

スタッフ 池野亮、大塚郁子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL06-6771-7641

FAX06-6770-3147

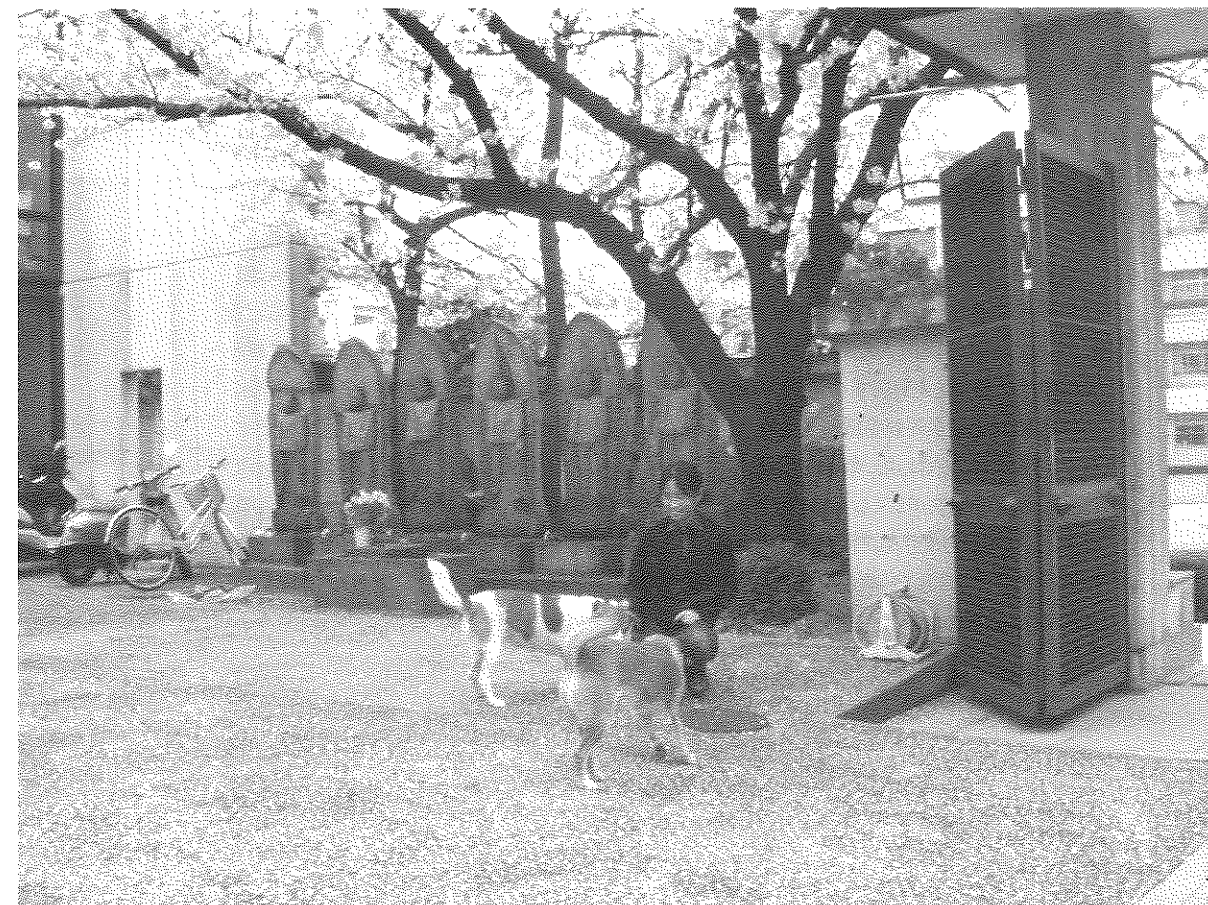
Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol. **37**

サリュ

フランス語で救いの意



自然界の桜は、つねに他と交配し親株と違った性質をもったものが生まれる。多くの品種が誕生し、進化し続けた桜はすべて個性的だ。ところが近年、手間のかからない単一種が好まれるという。

ある場所で偶然に生まれた変わった品種に、地域の名がつけられて親しまれることも数多い。地域や人と密接につながり、万葉の昔から人々を魅了し続けた桜。一種でなく、多様な花をこれからも楽しみたいものだ。

2003. April

劇場寺院(應典院)が、 真に“文化を創出する劇場”となるために ～2002年度寺子屋トークをふり返って～

寺町倶楽部のメイン事業のひとつである、寺子屋トーク。「こころ」をテーマに多様なジャンルから語り合うのが特徴で、2002年度は5回開催、通算35回を数えました。寺子屋トークを開催する意味を、“劇場”という側面から考えてみましょう。

劇場受難の時代?

大阪では昨年、扇町ミュージアムスクエアや近鉄劇場など劇場の閉館決定が相次ぎました。関西の演劇人たちは“大阪のど真ん中に小劇場を取り戻す会”を立ち上げるなど、劇場と社会を巡る議論を活性化させようと動きはじめました。劇場が閉館することは、たんに建物がなくなることだけを意味するわけではありません。作品という表現、観客一人ひとりの感動、演劇を通じて生み出されたさまざまな関係性など、目には見

えないけれど確かに存在した“文化”が消失することなのです。

しかし、すべての劇場が文化を生み出す使命を果たしている、と言い切れないことも確かです。演劇や劇場の存在意義を自らの言葉で語る、表現者と市民をつなぐ役割を担うスタッフの存在など、いくつかのハードルを乗り越えようとするによってのみ、本当の文化を生み出す劇場となり得るのでしょう。

劇場受難のいま、應典院にも同じ課題が突き付けられています。

2002年度 寺子屋トーク開催記録

【第31回】2002年4月7日

「仏に会う」

作家・立松和平さん

参加者200名

【第32回】2002年7月13日

「息を鍛え、芯を育む

～子どもの身体感覚を考える～」

明治大学助教授・齋藤孝さん

バドミントン幼稚園長・秋田光茂さん

AMI公認治療教師・立野由美子さん

参加者138名

【第33回】2002年7月23日

「不思議と出会う

～僧侶として、小説家として～」

作家・玄侑宗久さん

『現代教化』編集人・川副春海さん

参加者134名

【第34回】2002年9月28日

「東京vs大阪 都心暮らしの愉悅

～あなたのまちのタウンマネジメント入門～」

作家・森まゆみさん

大阪大学大学院助教授・渥美公秀さん

京都大学大学院助教授・高田光雄さん

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所客員研究員・

弘本由香里さん

参加者107名

【第35回】2002年11月30日

「からだ」と“こころ”のチューニング

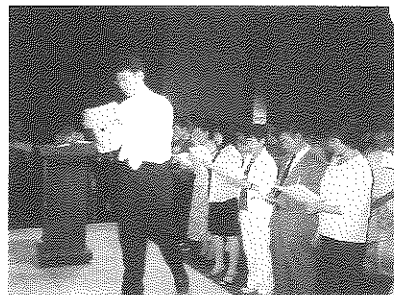
～＜建設的な生き方＞のススメ～

文化人類学者・デイヴィッド・K・レイノルズさん

日本吃音臨床研究会代表・伊藤伸二さん

参加者65名

累計644名



こころの追究と 参加者の自己創造

應典院がスタートして以来、その中心的な場として回を重ねてきた「寺子屋トーク」は2002年度に通算35回を迎えました。

その顔ぶれは錚々たるもので、とくに立松和平さん、玄侑宗久さん、森まゆみさんから、社会に発言する作家が続々来場したことが特筆されてよい一年でもありました。

4月、釈尊の降誕会を記念して、仏教小説家の顔も持つ立松和平さんの「仏に会う」に始まり、炎暑厳しい7月には、ベストセラー『声に出して読みたい日本語』の著者で、明治大学助教授の齋藤孝さんと、芥川賞作家で僧侶の玄侑宗久さんが連続で登場、いよいよ熱い論議が交わされました。

9月には、地域雑誌の草分け「谷根千(やねせん)」の発行人であり、日本のまちと人を見続けてきた森まゆみさんを招き、上町台地のまちづくりについて議論を展開、また11月には文化人類学者のデイヴィッド・K・レイノルズさんが、日本の森田療法や内観の研究を通して「建設的な生き方」を提唱

しました。2002年度ののべ参加者はじつに644名に上ります。

ジャンルは多様にわたりますが、寺子屋トークに一貫しているものは人間のこころの追究を図ること、そして一方的な講演ではなく、参加した人々が話を立体的に受けとめるための創意を凝らしていることに尽きます。言いかえれば、受身になりがちな聞き手が少しでも創造的に生まれ変わるための場を、一貫して心がけてきたと言えます。う。一々、中身はあげませんが、いずれのトークにも講演に続いてセッションが設けられ、ときに研究者が、実践家が対話者として登場し、ゲストと丁丁発止の応答を交わす。これが、寺子屋トークならではの醍醐味だと言っていってもいいかも知れません。

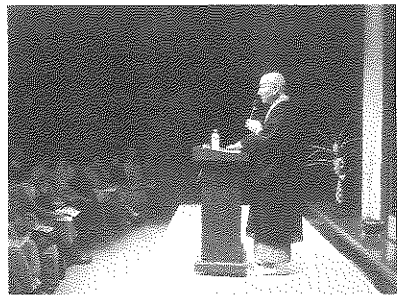
社会とつながる 創造の接点

もう一度、劇場と社会の関係に話を戻します。

演劇をはじめ芸術の場としての應典院と、寺子屋トークの開催される應典院は、まったく別々の、違う相貌をした場なのではないでしょうか。

そうではありません。

應典院が本当になくなくてはならない劇場になるために、寺町倶楽部は異質の出会いを設け、問題を投げかけ、存在を問いつけてきました。劇場は舞台と客席があればできるわけではありません。参加する者が自ら世界観を描き、そこに自分自身の基点を

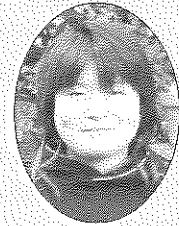


置くことであれば、劇場は社会に欠くことのできない“拠点”となり“学校”となり得るのではないのでしょうか。

劇場と社会との関係を再構築していくために、寺子屋トークの試みをさらに広げ、多くの市民が参画できる場としての活動を続けていきます。

Make Up Community

大阪府松原市に住む、ある一人のシニア女性。パソコンはおろか文章を書いたことがなかったのに、たまたま隣の住人に誘われ、お向かいの人と3人でメールマガジン「半径3キロの物語」(*1)なるものを発行することに。創刊から1年弱、いまや一人でお店を取材し原稿を書くなど、すごいパワーを発揮しています。その隣人、一人ひとりの力を引き出す仕掛け人である編集長、ちよんせいこ(鄭聖子)さんにお話を伺いました。



—コミュニティな人々 ちよん せいこさん

頼っているのはダメ。違いを埋めるためには粘り強いコミュニケーションが必要で、その一つの方法としてWSはとっても有効だと思いました。

メールマガジンを発行することもWSに似ていて、実際、「半径3キロ」のスタッフも自分の中にあるパワーを発揮。できることをどんどん増やしていきまし、何よりもその姿に私自身がいつぱい刺激をもらっています。

「仕掛け次第で人は変わる」。これから應典院でも、どんな仕掛けが展開されるのか、楽しみにしています。

今年の4月で、フリーランスの在宅ワーカー5年目を迎えます。ボランティアや人権、コミュニケーションをテーマにした研修の企画や、松原をホームグラウンドに活動するNPO「共生ユニット APUROまつばら」(*2)の運営マネジメントが主な仕事。2002年度からは阪南大学の「ボランティア実践」の担当教員もしています。講義や企画づくりのほとんどをワークショップ(以下、WSと略)形式で行っていて、参加者一人ひとりが力を出し合い、その姿に私自身が学ぶことも多いです。仕掛けを間違えると失敗するので「すごい賭けやな」と思いながらも、“WSの生み出す生産性”にやりがいを感じています。

なぜWSにこだわるのかと言えば、それまでやっていた一方通行の講演会にむなしさを

感じたから。障害者の共同作業所に勤めたことや、韓国にルーツがある男性と結婚し、APUROの立ち上げに関わるなど、ずっと「違いをプラスパワーに出力する」ことをしてきた関係で、依頼があれば講演などをしてきましたが、終了後に参加者から「がんばって下さい」と言われると、「私の話はなんやったんや。他人事で終わるのか?」とガックリ。エネルギーを吸い取られ、“消費される私”というイメージが拭えませんでした。

そんな消耗感が募っていた頃、フィリピン教育演劇協会(PETA)のスタッフを招いて演劇WSを行う機会があって参加。「一人ひとりの中には、こんなにも力があるんだ」ということを痛感したんです。講演にはない「参加者の達成感」ですね。それに違いを超えてつながるには、言葉や理屈だけに

(*1) 半径3キロの物語……2002年5月創刊。ちよんさんの“おとなりさん(たかさん)”と“おむかいさん(nobuさん)”がスタッフ。偶然にも、ひと回りずつ歳の離れた3人年生れの3人が織りなす「なによりむかしの物語」は好評で、「暮らしとパソコン」(ソフトバンク社発行)にも紹介された。

http://www.geocities.jp/HeartLand-Yurinko/1383/(*2) 共生ユニット APUROまつばら……1993年設立。大阪府から委託した「在日外国人と日本人のための演劇ワークショップ講座」を開催するなど、共生社会実現のためのさまざまな活動を展開中。
http://www.kawachi.zag.ne.jp/dpach102/apuro/

民学協働による人材育成を！

2002年度インターンシップを振り返って

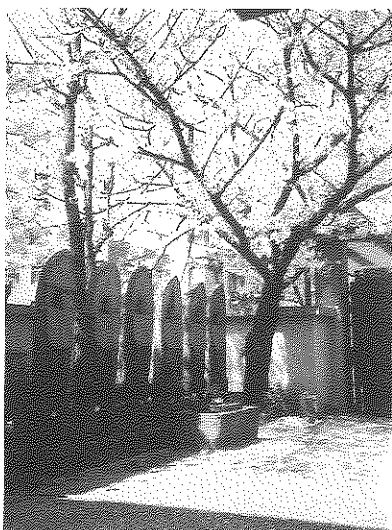
(財)大学コンソーシアム京都は、京都地域の50の国公私立大学・短期大学と、京都市、京都商工会議所をはじめとする経済4団体で構成される組織。文部科学省・経済産業省・厚生労働省が出した3省合同答申のもと、全国に先駆けて1998年度からインターンシップ制度(在学中に就業経験を行う人材育成システム)に取り組んでいる。プログラムは、ビジネス・ベンチャー・行政・NPOの4コース。過去5年間で、全コース合計のべ2891名の学生から出願があり、1777名を受け入れた。2002年度の実績では、受け入れ先は296団体(うちNPOは30)、応募学生数893名(うち派遣数は512名)。

多様性が引き出す“問い”

杉岡●昨年8月から週1〜2回、應典院でインターンとして活動させていただきました。

ここを選んだ理由は3つあって、まず、2回生のときにコンソーシアム(以下、“コンソ”と略)のインターンシッププログラム・行政コースで1ヵ月活動した経験があり、楽しさと厳しさの両方を体験してインターンの魅力にはまったんです。2つ目は、2年半前に自身が地域通貨のプロジェクトを立ち上げ、継続していくためにNPOマネジメントを学ばなければ、と考えたこと。3つ目は、私のことを知ってくださっているコンソの職員が「多彩な事業を展開しているところがある」と應典院を勧めてくれたことです。

秋田●應典院のインターンは杉岡君が5代目になります。ここはNPOワーカーやアーティストなど多様な人々が集まってくるので、学生は多くの出会いに触発されて、いろいろな“問い”が芽生えるようですね。



うちのスタッフもインターンの問いに向き合い、仕事の意味を問い直すなどして、ともに成長することができる。そこにインターン受け入れの果実があると思っています。

新野●ここが多様であることは重々承知していますが(笑)、「インターン」という言葉が一般名詞化するに伴って、受け入れ先も学生も多様化してきて、コーディネートする側の私たちはミスマッチが生じないように細心の注意を払っています。

これはあくまでも今後の希望ですが、「Aさんには編集作業を、Bさんにはイベント企画を」というように、多様なニーズや能力に応えられるメニューをがあるとありがたいですね。應典院であれば、それが可能ではないでしょうか。

秋田●確かに多様なプログラムは必要でしょう。でも、若いときに大事なものは、編集や企画の技術習得だけではなく、自分に内在している力、たとえば問う力・出会う力・つながる力に気づくことだと思うんです。

こういう、無尽蔵にもっている自分の力に気づくことが、社会に参加していく上で最大の武器になると思います。

杉岡●インターンもNPOも一般名詞になりつつありますが、就職部の冊子や新聞を見るとほとんどが企業で、「就職先としてのNPO」という概念はまだ市民権を得ていません。

でも、実際に8ヵ月間働いてみて、「NPOは言葉の示す通り、やはり組織(Organization)で、ベンチャーと同じ」だと思いました。事業計画や予算を立て、情報公開もする。しかも社会的使命に基づき、



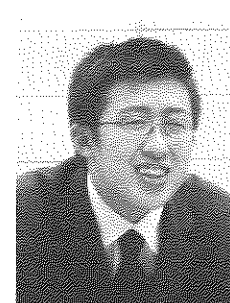
リスクを背負ってでもやる行動力があるということ、じかに体感できたのは大きかったですね。

経済的価値だけに重きをおいていないNPOワーカーの方々と出会い、「志でつながった縁」から学んだ、問う力・出会う力・つながる力は一生の財(たから)になると思いました。

明確な目標があってこそ

秋田●受け入れ側の達成感も重要で、「こういう人材を育てるのか」というところに焦点を合わせ、きちんと事後評価もしていきたいので、今後は大学教員の方々に参画していただきながら“民学協働”ともいえるインターンの受け入れ体制を模索したいと考えています。

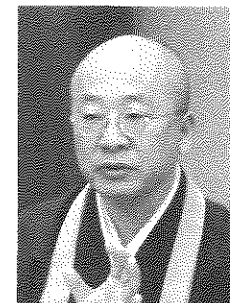
いま、日本社会は大きな転換期を迎えています。これからもっと学び手が主人公となって創造的活動を行う“学習社会の時代”を迎えることになります。ところが、悲しいかな今の大学は、学生の“問う力”を奪い、囲い込んでいるという印象があります。新野●その指摘はインターンシップ事業を立ち上げる前からあったもので、コ



新野 豊さん



杉岡秀紀さん



秋田光彦

ンソでも議論を重ね、その理念を設立趣意書の大きな柱としました。そして、高等教育改革のリーディングセクターとなるべく、単位互換制度やインターンシップ制度等を実現してきたわけです。

インターンシップも、送り出し側の丸投げにならないよう、大学教員にもコーディネーターとして事業に関わってもらっていますし、コンソ自体も受け入れ先と連携を密にして、事業に取り組もうと努力しています。

秋田●「新規採用はインターンの中から」と公言するような企業も出はじめましたが、NPOは職員を毎年新規で採用することはめったにありません。

「学生の青田買いだ」という批判はさておき、インターンを受け入れることの意義は何なのか、送る側と受ける側が一緒になって真剣に考えたいですね。

新野●まさにその通りで、大手企業のリクルーティング活動だけではなく、多様な受け入れ先を得ることのできるメリットを考えていかなくてはなりません。

さまざまな大学が独自のインターンシップ制度を導入しはじめ、コンソ独自の魅力ある制度を打ち出していくことが必要になります。今後は従来型のものはもちろん、教員の担う部分がより大きいプログラム、長期版のプログラム等の取り組みもはじめています。

まちづくりは人づくり

杉岡●應典院で学んだ最大のことは“手

◇ご出席のみなさん◇

- ★新野 豊(いの・ゆたか)さん
(財)大学コンソーシアム京都 インターンシップ事業推進室
- ★杉岡秀紀(すぎおか・ひでのり)さん
インターンシップ生、同志社大学経済学部郡島ゼミ4回生
- ★秋田光彦(あきた・みつひこ)
應典院寺町倶楽部事務局長

の平ネットワーク”です。スタッフ間でTPOに応じてリーダーとフォロワーの役割を変化させている。企業のようなトップダウン方式に比べれば時間はかかりますが、話し合いを重ねていく姿勢を内側から、自分もその指の一本のように関わったことは有意義でした。

秋田●仕事の生産性とスタッフ育成とのバランスをどうとるかはずねに課題ですが、この点についても大学教員の知恵を借りたいところです(笑)。

いま、まちづくりにも取り組んでいるんですが、地域の魅力は構成員であり、構成員の魅力を作るのは学習だと思うんです。大学が地域とどう関わっていくのかも含めて、“人”という資産をどう育てるかは、民学協働によるインターンシップにも大いに関係してくることでしょう。

新野●「地学連携」といわれ、大学も生き残りをかけて地域との接点を増やそうとしています。私たちコンソも現場と乖離しないよう情報交換を密にしながら、大学連合というスケール・メリットを生かした、多様で階層的な関わりをしていけるよう努力していきますので、今後もしよろしくお願いたします。

SPACE RAMA
2003

参加劇団紹介Part2

me-te-lui-luixx

「あたたかくせつない物語」をテーマに、セピア色の世界を作り出す癒し系劇団。役者一人が複数の役をこなし、バラ

バラに散らばった世界がやがてつながり合うというストーリー展開。お家芸である物語性あるポップなダンスの他、アカペラや映像パフォーマンスなど、毎回違った試みも楽しめる。劇団結成は3年前。それまで他劇団で修行を積んできたメンバーに、新たに演劇初心者を加え、表現活動にさらなる幅をもたせた。日々身体的訓練から感情解放まで、基礎訓練を欠かさず行い、年1〜2回の本公演に向ける。今回の舞台芸術祭では、ふだん自劇団を見たことがないという、より多くの方々にも見ていただけることから、メッセージを込めて、身近な世界での「劇場」から、大きな世界での「自然」や「命」「夢」など、失われていく数々のものをテーマに終わらない物語を描きたいと思う。少数だが信頼のおけるメンバーと「笑って泣ける」舞台作りをめざしている。

たぶん私たちの芝居を見てもオゾン層は増えないし、戦争はなくならないだろう。だけど、もし、この何者でもない私たちの紡ぎだす物語が、眠れない誰かの子守唄になれば……と思い、舞台を作っています。



劇団アクスピ

(8/25〜27公演予定)

私たちはターニング・ポイントに立っていた。2001年の第9回公演の後、活動休止とし、劇団員各々が芝居を見つめ直し、自分磨きに奮闘していた。全員が執筆、演出、他劇団への参加で、自分たちの劇団とはまったく違った芝居にふれるなどなど、チャレンジ&チャレンジの日々。そして2002年8月、再び魂の集結。「この成果をどこで発揮すればいいのだあ〜!」とそんな中、ふと手にした一枚のチラシ。「ん?可能性の交差点……」。こ、これだ! 自分たちのしてきたことが出せるような……この言葉がまさにいまの自分たちにあるような……そんな熱き思いの中、一直線で参加に向かったのだ。新生アクスピのおもしろさを最大限に広げられるような、また再出発の大きな一歩となる公演にしたいという思いと、創造者側も観客も一緒になって楽しめる新しい「お祭」にしたいという思いをもって、「アクスピ」とは、劇団アクターズスピリット(役者魂)の略称。「魂の集団」と呼んでください。必ず魂をお届けします(でも、めっちゃ Comedy)。



特攻舞台Baku-団

(9/1〜3公演予定)

【特攻舞台Baku-団】…演出は謎の仮面レスラー「Baku-団マスク」が担当。また、専属のスタッフ集団「BS- II (BakStage Staff)」によるスタッフ・ワークなど、役者のみならず全員が強烈な個性をもっています。

【Baku-団の魅力】…実際の舞台では、名前どおりのパワフルで爆発的なパフォーマンス、そして練り込まれた脚本と緻密な演出が見どころ。演劇を見たことがない人たちにも、生の舞台の魅力を感じてもらえるようなエンターテインメント性の高い作品、既存の演劇の枠組みにとらわれない作品をめざしています。

【コンセプト&作品のカラー】…作品のコンセプトは、生きる欲求(リビドー)をエンターテインメントに乗せておく「リビドーテイメント」。観る人すべてに生きる活力を与えたい、という思いから生まれました。重いテーマでもポジティブに立ち向かう。エネルギーあふれる舞台がBaku-団のカラーです。

【舞台芸術祭への意気込み】…初めての演劇祭で、緊張しつつも興奮しています。他の参加劇団といっしょに影響を与え合えたらと思います。そして演劇祭を通じて、僕らの活動の場を広げたいです。もちろん、2004年の3者協働プロデュース公演を狙いにいきます。よろしくお願いします!



満月動物園

(9/8〜10公演予定)

満月動物園は1999年2月、大阪市立大学劇団カオス出身の戒田竜治を中心として結成いたしました。人間の発する言葉への懐疑という視座を貫き、60年代のアングラ芝居の視点、80年代の「静かな芝居」の思想、またコンテンポラリーダンスの思考などに薫陶を受け、よりシンプルで力強い言語の獲得をめざしてこれまで活動を続けてまいりました。

満月動物園第14作目にあたります、今回の舞台芸術祭参加作品『Real Second』(仮題)では、その基本的スタンスをさらに押し進め、昨年来掲げております「五感に訴えかける舞台」のさらなる発展をめざします。

また、シアトリカル應典院では4度目の公演となる今作品では、同じ劇場とじっくり長く向き合うことで、劇場固有の空間性を引き出してきたこれまでの活動の、さらなる飛躍をめざしていきたいと思っています。



とうとうイラク戦争が始まってしまいました。国際世論など意に介さず、アメリカの単独優越主義といってよい横行に、たいへん怒りを覚えます(アメリカ人がなぜ戦争好きなのか、最近見た映画「ボーリング・フォー・コロンバイン」は見事にこれを看破しています)。

しかし、テレビで連日報道される戦争を見ていると、圧倒的な現実にはびし無力感に苛まれます。そんな時の無関心がいちばん怖い。世界の歴史を作るのは、大国でもなければテレビでもありません。私たち一人ひとりが自分の言葉でこの戦争を語る。家庭で職場で、戦争を語る小さな声の集積が、やがて歴史をつくるに違いありません。

中国の魯迅はこんな言葉を残しています。「そもそも地上に道はない。私たちが歩いたところが道になるのだ」……。仏教は大慈大悲の教えの宗教です。対話と共生の精神で、一日も早い武力攻撃の中止を望みます。

■院代に高橋光薫師就任

昨年の晋山以来、ご縁を求めてきた新しい院代に、茨木市・慧光院徒弟の高橋光薫師が就任、4月より勤務することとなりました。



高橋師は昭和26年生まれ、大学卒業後、一般社会で研鑽を積み、その後、出家されて昨年知恩院の伝宗伝戒道場を満行、晴れて浄土宗教師となりました。たいへん真面目で、勉強熱心な人柄で、よき人材に恵まれたと感謝しております。今後は、毎日の速夜詣を中心に、大蓮寺の法務全般に私とともにあたっております。

■佼成会の中学生たちが団参

去る3月22日に、立正佼成会の高崎教会青年部の一行が、中学生約30名とともに應典院を団体参拝しました。総勢40名。

一行は「平和学習の旅」として、広島市の原爆資料館を見学研修、その帰路に大阪に立ち寄られたもの。應典院で中学生を対象とした、いのちのパフォーマンスの上演となりました。前半は、詩の学校の上田假奈代さん他によるポエトリー・リーディング、後半は私がささやかな法話を勤めさせていただきました。

中学生の団体参詣はもちろん初めて。勝手がわからず苦労しましたが、最後に教会長さんからは、身に余る謝辞を頂戴し、感謝してしまいました。

エンディングサポートの集い、満場の盛況!

去る3月23日、大蓮寺・エンディングを考える市民の会が中心で「エンディングサポートの集い」を開催。人生の完成期をみんなで支えようという呼びかけに呼応し、満場の140名が参加しました。

既報の通り、昨年来、生前個人墓「自然」にリンクして、死後の自己決定をテーマに準備されてきたもので、ノンフィクション作家の井上治代さん、ささえあい医療人権センターCOML理事長の辻本好子さんらエンディングに関わる多数のゲストとともに死後の準備と安心について話し合いました。

会場は60代前後の方で一杯で、アンケートも回収率77%と、この問題に対する関心の高さがうかがえました。考える会では、今後はセミナーのほか、個人相談の中継なども予定。新しいお寺とNPOの協働スタイルとして、期待してください。



秋田住職発

應典院
掲示板

■エンディングセミナー

既報の通り、應典院本寺の大蓮寺では、社会事業の一環として、エンディングサポートの取り組みを開始しましたが、4月、5月にそれぞれ「葬送」「税務・相続」をテーマにしたエンディングセミナーを連続開催。すでに4月分は、ほぼ定員締切り状態で、うれしい悲鳴を上げています。5月のセミナーはまだ余裕がありますので、ふるって申し込みください(各回とも13:30〜15:30、参加費1000円)。

【5月のエンディングセミナー】

- ・1回目…5月7日(水)
「エンディングから考えるライフデザイン〜LDSが目指すもの」
- ・2回目…5月14日(水)
「知っておきたい遺言と相続の話〜人生最期の約束」
- ・3回目…5月21日(水)
「自分でできるか、死後の手続き〜健保や年金他の後片付け」
- ・4回目…5月28日(水)
「どう使いますか?あなたの生命保険〜死後を支えるお金の話」

■礼拝写経道場

應典院のある下寺町の若手僧侶による三帰会では、毎年教化事業を実施していますが、今年は来る5月30日、光明寺様で「礼拝写経道場」を開催することとなりました。

写経とはお経文をなぞり写す、人気の高い在家修行ですが、これに三帰会メンバーによる法要と礼拝が併修されるもの。江戸時代の壮麗な光明寺様の本堂を会場に、法悦の体験を約束します。

参加費2000円。詳しい資料・申し込みは大蓮寺(06-6771-0739)まで。